

片倉佳史著・劉添根訳

『台灣風景印—台湾・駅スタンプと風景印の旅—』

玉山社 (台湾) 刊

2008年3月 279頁 NT\$480

本書は、台湾でフリーライターとして活躍する著者¹⁾が、現地で知己となった古老が収集してきた駅の記念押印用スタンプのコレクションと出会ったことが執筆の動機付けとのことである。7年余の歳月をかけて複数のコレクターからスタンプ帖の提供を受け、そこから写し取った印影群から成り立っている。出版元をみてわかるように、台湾で出版・流通する本書だが、日本語と繁体字の中国語とが対訳・併記され、評者でも読むことができる体裁になっていることに特徴がある。

本書では、駅に配備された記念スタンプ（以下、駅印）を「風景印」と呼んでいるが、この直接の起源は、大正～昭和初頭に発生した旅行ブーム期に求められる。台湾における初見は、著者によると1932（昭和7）年と推察され、内地における初見とされる福井駅の1931年5月と、大きな時間的差をおかずに導入されたようである。しかしながら、このような駅印が、その「場への到達証明」だとすると、巡礼時の朱印にこそその源流を求められるのかもしれない。いずれにせよ、今日でも駅印があればつい押してしまうし、近年では鉄道事業者がスタンプラリーを実施するように、市民権を獲得している存在であろう。

本書の構成と、駅印の配備駅として取り上げられた駅数（印影の種類数+JTB案内書配備印）を挙げると以下の通りである。

序

前言

01 縦貫線	27 駅 (44+2)
02 台中線	4 駅 (6)
03 潮州線	5 駅 (8)
04 淡水線	5 駅 (6)
05 集集線	3 駅 (4)
06 宜蘭線	8 駅 (10)
07 台東線	5 駅 (6+1)
08 阿里山鐵道	2 駅 (4)
09 急行列車乗車紀念戳章	4 編成 (8)
附録 郵政風景印の世界	31局

駅数と印影の種類数が一致しないことでわかるように、駅印はデザインの更新が頻繁に行われていた。このため、今日の視点から、その全容を知る術がない²⁾だけに、コツコツと集めてきた大事なコレクションを託されるほどの信用を現地で築き上げてきた、著者ならではの非常に丹念な仕事であると敬服する。

幹線として敷設された縦貫線で配備駅・種類ともに多いのは当然ながら、集集線のような短い支線でも駅印が配備されていたことがわかる。本書はこれらの印影に加え、当時の写真資料や、『鐵道旅行案内』、『大日本職業別明細図』などの資料を添えて構成されているため、当時の各地の様子を知ることができ、書中旅行をしているかのごとき気分させてくれる。

実は当初、評者は「風景印」の用法にやや違和感を持っていた。郵趣界では、全国の郵便局の約5割に配備されている「風景入通信日付印」（以下、局印）と呼ばれる消印が、コレクションの対象となっている。この略称が風景印であり、コレクションの市場性という観点もさることながら、消印としての公的性格から、局印の方が「風景印」の語になじみが良い。本書は、その点についてもぬかりなく、駅印についての記述の後、巻末に附録として局印についての紹介も併せて掲載している。局印の内地における初出も1931年であり、志賀重昂『日本風景論』による身近な風景の資源化が、このような形で成果を示したといえるのかも知れない。であるとしたら、地域における景観資源をスタンプの図案という形で可視化し、携行・保存を可能にしたという点で、駅印も局印も同じく「風景印」と呼びうるものであると認識を改めさせられた。

さて、ここで「このような、趣味的世界のコレクションが学究の対象たりえるか？」との批判に回答せねばなるまい。確かに、どちらの「風景印」も、作成当初からコレクションの対象として、大いにマニアの心をくすぐってきた。1931年に登場した駅印に関しては、早くも『駅旅行記念印目録 改訂版』³⁾や『地方別線別駅印総目録』⁴⁾などのカタログが世に出された。この楽しみは今なお色あせず、『JR西日本エリア約550駅—スタンプでめぐる鉄道の旅』⁵⁾などの書が再生産されている。局印についても同様で、『風景入スタン

ブ集』⁶⁾、『戦前の風景スタンプ集』⁷⁾から、『風景印2008』⁸⁾まで途切れることなくカタログが刊行され続けている。また、大手オークションサイトを見ると、常に出品がなされ、活発な取引が行われている実態があり、「風景印」は極めて趣味的世界の産物なのである。

しかしながら、ここで留意せねばならないことは、「風景印」が地域の景観資源をデザイン化しているという点である。いうまでもなく、そこには実存する景観から、地物の取捨選択がなされ、結果として理想的な風景が表出している。即ち、図案の作成者が、地域をどのように見せるか工夫を凝らした成果が、「風景印」に示され、配備された。「風景印」は、現在ほど観光情報にあふれていなかった当時の旅行者に対し、地域をイメージさせる道具として活用されていたのであろう。もちろんコレクションとしての性格は、写真機の個人所有が一般化する以前においては、帰宅後に旅行を振り返り、追体験をするための道具にもなりえたはずである。後藤泰彦は、局印について「本来の景観は展示者によってゆがめられ」、「展示者の感性や技術が総動員された」存在であることを指摘したが⁹⁾、旅行者にとって受容できる程度の「ゆがみ」や嘘は、大衆迎合のために許容され、ステレオタイプ式の地域イメージの定着をもたらしたのかも知れない。香川貴志は、このような地域事象を程よくまとめた局印を大学生のプレゼンテーション能力涵養のための教材として活用する実践報告を行っている¹⁰⁾。実は評者も、この報告に刺激を受け同じような試みを行っているが、須山聡が「景観のリテラシーを構築するための格好の素材」¹¹⁾とした局印に対する評価がその根幹にある。局印については、公的な性格を持つことから上記のような研究蓄積がなされつつあるが、駅印を含めた「風景印」も、公私の性格の別を抜きにすれば、全く同じ機能と性質を有し、同様な研究アプローチが可能であろう。

歴史地理学的に考えるのであれば、歴代図像の変遷を把握することにより、①地域景観資源の変化、②地域イメージの固定化・ステレオタイプ化の過程に対する分析、などの課題を設定しうると考える。前掲『駅旅行記念印目録』・『地方別線別駅印総目録』の2書は、旧植民地を含め、駅印の配備に関する目録であり、印影そのものは割愛さ

れているため、本書は良質な資料集として活用することも可能である。

評者は、試みに本書掲載「風景印」と、駅印については『駅旅行記念印目録』・『地方別線別駅印総目録』の2書と、局印については『戦前の風景スタンプ集』を用いてカバレッジを検討してみた。まず、駅印については1935年までに記録されるものを漏れなくカバーしているのみならず、5駅について追録されている。さらに、2書中に記録される使用開始日の情報を遡る印影が12点発見された点は特筆する必要がある。一例を挙げると、縦貫線大甲駅は、『地方別線別駅印総目録』では1932年8月10日、『駅旅行記念印目録 改訂版』では同年8月27日とされているが、本書では同年8月9日の印影が示されている。2書は上述のように印影が割愛されているため、本書に示された印影は、実物資料として従来情報を更新しうる、非常に強い説得力を有する。なお、局印について『戦前の風景スタンプ集』では、台湾で32局に配備されていたことを印影を添えて紹介しているが、本書では31局分しか掲載されていない。評者が、著者にこの点を質問したところ、「目にしたことはあったのですが、最後まで収集家を見つけ出せず、あきらめた一個」と、現物主義を貫いたことを吐露された。このような姿勢を含め、上記新発見は本書の価値を一層高めるものであろう。

本書の国内における購入方法については、著者のブログ「台湾特搜百貨店〜片倉佳史の台湾体験〜」¹²⁾の中に紹介されている。このブログは評者も参考にさせてもらうことが多く、本書とともに一覽を勧めたい。

〔注〕

- 1) 著者は、月刊「地理」誌上で「元社会科教師の海外取材ノート」(1997年1月～1998年5月)、「台湾に残る「日本」を散策する」(1998年8月～1999年4月)などの連載記事を掲載していたため、ご存じの会員諸氏もいるかも知れない。
- 2) 今日的な視点のみならず、当時のコレクターである柘植も『地方別線別駅印総目録』の「はしがき」で、「元來駅印は局印の如く正確な発表機関がないので何時何處に新印が出て

- るるやら判らず」, 「使用開始日はすべて各驛長宛に照會してその回答を集めたものであるが中には出鱈目な回答をしてくる處もある」と嘆いている。
- 3) 慶谷俊雄編『駅旅行記念印目録 改訂版 昭和7年12月10日現在』, 慶谷俊雄, 1932, 20頁。
 - 4) 柘植宗澄『地方別線別駅印総目録』, 河内書店, 1935, 115頁。
 - 5) 山と溪谷社編『JR西日本約550駅 スタンプでめぐる鉄道の旅』, 山と溪谷社, 2008, 576頁。
 - 6) 日本郵趣協会優秀編集部編『風景入スタンプ集 都道府県別 1967年版』, 日本郵趣出版, 1966, 159頁。
 - 7) 橋本章監修『戦前の風景スタンプ集』, 日本郵趣出版, 1976, 159頁。
 - 8) 武田聡編『風景印 2008』, 鳴美, 2008, 694頁。
 - 9) 後藤泰彦「風景印にみる地域の『展示』—千葉県を例に」, 駒沢大学大学院地理学研究 33, 2005, 19~32頁。
 - 10) 香川貴志「大学新入生における調査能力とプレゼンテーション能力の育成—風景印を用いた平成15(2003)年度「基礎セミナー(社会文化)」における実践例」, 教育実践研究紀要(京都教育大学) 4, 2004, 45~53頁。
 - 11) 須山聡「風景印にみる地域の提示」, 非文字資料研究3, 2004, 16~18頁。
 - 12) <http://katakura.net/>

お詫び

本誌50巻3号に掲載されました拙評, 「黄 武達編著『日治時期台湾都市発展地図集』中, 恒春鎮にかつて「パイナップルの缶詰工場」があったと記述致しましたが, 正確には「シザル麻を加工する製麻工場」の誤りでした。訂正致します。

(天野 宏司)